

研究助成実施報告書

助成実施年度	2022 年度
研究課題（タイトル）	歴史ある遺跡を中心とした公園計画とまちあるき拠点による地域創生計画
研究者名※	橋本 彼路子
所属組織※	長崎総合科学大学 工学部工学科建築学コース 教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市計画、都市景観
助成金額	125 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

（ ）は、報告書提出時所属先。

大林財団 2022 年度研究助成実施報告書

所属機関名 長崎総合科学大学
申請者氏名 橋本彼路子

研究課題	歴史ある遺跡を中心とした公園計画とまちあるき拠点による地域創生計画
(概要) ※最大 10 行まで 長崎県諫早市多良見町の丘陵に大きな石碑（高さ 2.5m、幅 1.2m）がある。2003 年 12 月、16 世紀の天正遣欧使節の一人、千々石ミゲルの墓である可能性が高いということで地元の研究者らにより調査が始まり、2022 年 4 月正式に千々石ミゲルの墓と実証された。天正遣欧少年使節のうち墓が発見されたのは初めてである。地域住民から墓所の公園化を計画したいという協力要請を受けた。活動してきた主な人々へのヒアリング調査や住民参加型ワークショップ等や実施し、ミゲルの墓保存と歴史を伝えるだけでなく、バリアフリー・防災（災害拠点）・地域の産物や周辺環境の活用による点から面の展開「まち歩き（さるく）」など、多様な視点で総合的な建築計画を提案し、まちの魅力の気づきと記憶の継承を意識した広報的啓蒙にも繋げていく計画を行った。ミゲルの生涯を表す絵画を長崎県の特産である波佐見焼で作るという住民の提案を受け、波佐見焼の業者の協力を得て 2023 年 12 月、1 枚の精巧な 60cm 角の陶板を制作することができた。	

1. 研究の目的	(注) 必要なページ数をご使用ください。
千々石ミゲル墓所調査や活動は民間の力で長年粘り強く行われてきた。雲仙市・大村市の人々がクラウドファンディングで費用を募るなどをして継続的に実施してきた調査は、民間の力で歴史的成果を挙げたと評価されている。今回は長年の活動の成果である国レベルの歴史資産を、民間主体で、かつ学の参画でその中立性や総合的視野により、保存・活用を行政に結び付けることや地域活性を実現するなどに発展させていくことを目的としている。	



図 1 墓所周辺

2. 研究の経過	(注) 必要なページ数をご使用ください。
大きな石碑がある場所は、周囲はみかん畑が広がる丘陵である。地域では古くから千々石玄蕃の墓と伝わっていた。千々石玄蕃は千々石ミゲルの息子で名前が石碑の背面にあったことから、そのように伝わっていたが、千々石ミゲルの墓と実証されたことは、大きなニュースとなった。千々石ミゲルはヨーロッパに向かう途中、世界各地の行く先々で日本人が奴隷として売られる惨状を目にし、4 人の天正遣欧使節団の中で帰国後唯一棄教したためキリスト教徒からは裏切り者のような存在となり、亡くなった年や場所も明らかではなかった。	



図 2 大きな石碑

地上墓石は仏教の戒名が彫られていたが、地下には二つの墓坑があり、男女の遺骨とヨーロッパ製ガラス片やロザリオの部品などがありキリシタン的な様相であった。このことから、イエズス会を脱会したが、キリスト教の信仰は継続していた可能性が高く、長崎出身のミゲルの名誉回復ができるのではないかと議論が広がっている。そして、第5次千々石ミゲル墓所調査プロジェクト（2022年5月より）会員代表から千々石ミゲルの墓所の公園化にあたり、協力依頼を受けた。

2.1 敷地調査

敷地は斜面地にあり複雑な形状であるため、詳細な距離や高さ関係を把握する必要があった。



図3 計画敷地の様子

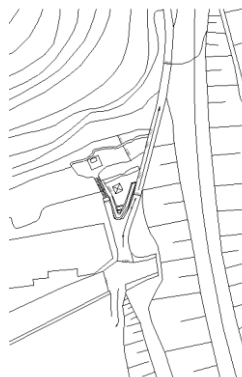


図4 実測の様子

2.2 ワークショップ、ヒアリング調査

地域の住民や学生たちの意見や提案を丁寧に拾い上げ、地域の住民との交流から得た情報を整理して方向性を示して計画コンセプトを検討した。

2.2.1 ワークショップ：大学生を対象

建築学3年生42名を対象に千々石ミゲル墓所調査プロジェクトの事務局長から千々石ミゲルの歴史や調査プロジェクトのいままでの活動の経緯を説明してもらい、敷地模型や図面を使って対象地の計画を行った。そして、6グループに分かれてKJ法を用いて提案をまとめていった。

2.2.2 ワークショップとヒアリング調査：地域の住民を対象

敷地周辺地域の住民と千々石ミゲル墓所調査プロジェクト会員を対象にワークショップを行うことで活発な意見やアイデアを把握した。また、後日、ワークショップ参加者内4名にヒアリング調査を行った。

2.3 地域住民とのふれ合い

千々石ミゲルの墓の維持のために、草取りや清掃、周囲の修繕などの活動している地域住民の大半は高齢者たちである。ヒアリング調査やワークショップに参加いただいたことと、若い学生たちの希望もあり、草取りや竹藪から切り出した竹で墓所の囲いをつくる作業を手伝うことにした。これらの活動は地域の住民の千々石ミゲルの墓に対する住民の気持ちを知り、学生たちの計画に対するモチベーションを高める機会となり、地域住民から様々な助言をいただける場を得ることにつながった。



図5 地域住民の活動に参加

3. 研究の成果

(注) 必要なページ数をご使用ください。

3.1 敷地調査

敷地の資料収集や実測の結果から図面や模型により可視化し、敷地の特徴を把握するために模型を作成した。模型は、研究室のメンバーの敷地詳細の理解とともに、ワークショップの際に敷地を理解してもらうために役にたった。

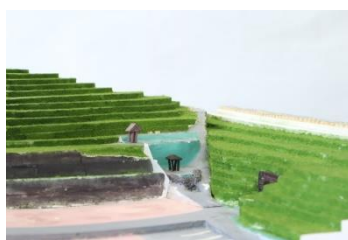


図6 敷地模型



3.2 ワークショップ、ヒアリング調査

3.2.1 ワークショップ：大学生を対象

建築的な意見や魅力ある地域にするための様々な提案があった。幅広い年齢層のことを考えたバリアフリーの配慮など意見もあり、地域の住民だけでなく、誰もが訪れて楽しめることを念頭に、公園計画やまち歩き「さるく」を行うことにした。



図7 学生対象ワークショップの様子

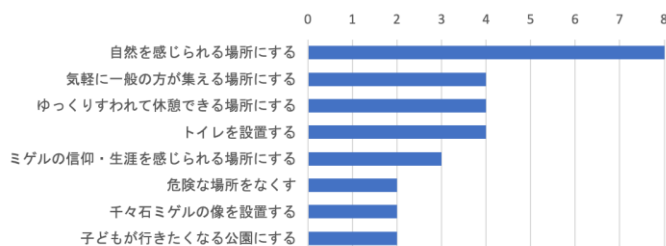


図8 望まれる公園像



図9 施設や設備の提案



図10 計画敷地周辺について

3.2.2 ワークショップとヒアリング調査：地域の住民を対象

主な意見を図12に示す。地元の名物（みかん、アボカド等）や産物（諫早石、波佐見焼など）を活用すべきという意見、無人駅の設置や千々石ミゲルの歴史を背景とした提案があった。



図11 住民対象ワークショップ

- ・墓所の上に生えていて墓を守るようにある木々を大切にすべき
- ・ミゲルの生涯を示す壁には、ステンドグラスを使うべきである
- ・地元の諫早石をなるべく使った計画にするべきである
- ・ミゲルの生涯を示す壁画は波佐見焼を使ってはどうか
- ・カフェで伊木力名産のアボカドを使うのがいいと思う
- ・特別支援学校の生徒たちが作ったもの（ミゲルクッキーやミゲルカレーなどをカフェやレストランで販売する。
- ・無人駅をつくり、駅名を「千々石ミゲル駅」にする
- ・玖島城を望む高台に展望台を設けるのがよいのではないか
- ・駐車場を墓所横ではなく玖島城を望む高台に設けてはどうか

図12 住民対象ワークショップとヒアリング調査結果

3.3 地域住民とのふれ合い

ワークショップやヒアリング調査で住民から、近辺に座る場所が少ないという声を聞き、外部に置ける頑丈なベンチを作成しようという声が学生からあがった。地元の竹藪の竹、ミゲルがヨーロッパに渡航する道すがら見たであろうインドの花々や地中海のレモンやオレンジなどを学生が描き、2台寄贈した。千々石ミゲル墓所調査プロジェクト代表の浅田氏がブログで住民たちが利用している写真を掲載した。



図 13 ベンチを作成する様子



図 14 浅田昌彦氏のブログから
(千々石ミゲル墓所調査プロジェクト代表)

3.4 ミゲル公園計画案

敷地は所々傾斜が急なところがあり、高齢者などのアクセスに問題がある場所である。さるく（まちをぶらぶら歩くという意味の長崎弁）の散歩道や施設の計画により、ミゲル墓所周辺（多良見町山川内）の里山の風景の素晴らしさを多くの人々に知ってもらう計画にすること、人々が集うことのできる環境をつくり地域の活性化に繋げる計画とすることにした。



図 15 敷地周辺現況図

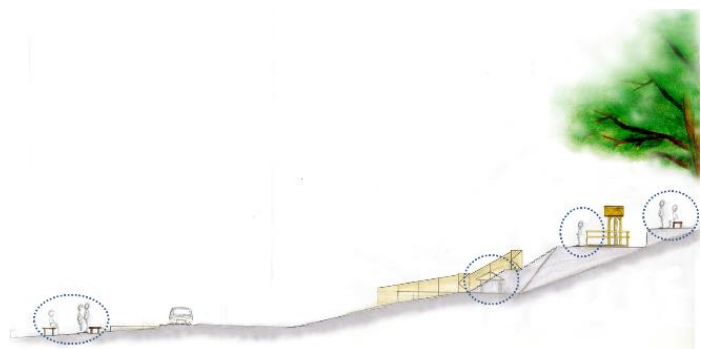


図 16 敷地周辺スケッチ図

車いす使用者や高齢者の利用の際の駐車スペースを、当初、墓地横の空き地を車いす用駐車場の候補としていたが、墓の一部である可能性があることがわかり、斜面を少し上がった場所に設けた。ここは見晴らしのよい開けた場所で、ミゲルが棄教後に仕えた大村藩の玖島城のある地が、ここから大村湾越しに見ることができる。また、ワークショップで無人駅を作ることの提案が住民よりあったので計画案に取り入れた。一般の駐車場は公道の近くの休耕地（地域住民に確認）に設け、駐車場と小川の間の桜並木のそばの未使用の場所も小休憩場所として活用することにした。住民対象のワークショップで敷地南側の隣地との間にある既存のアルミの壁は色や素材やデザインが合わないなどの意見があったので、ミゲルの生涯を示す絵画を示す壁（図 19）を提案した。住民から長崎県の特産である波佐見焼での作成する提案があった。

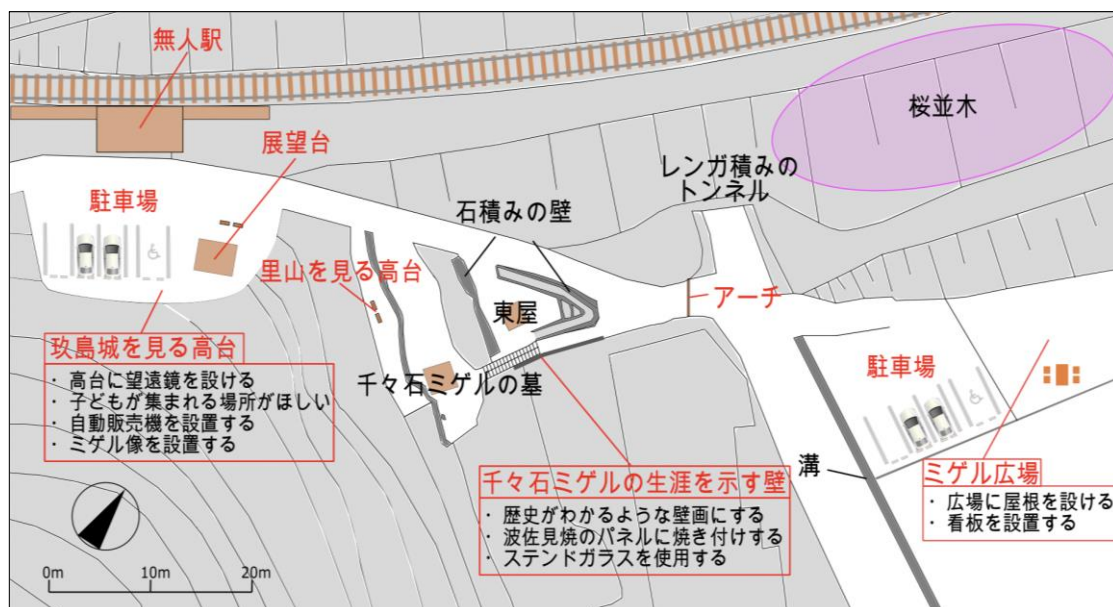


図 17 公園計画面

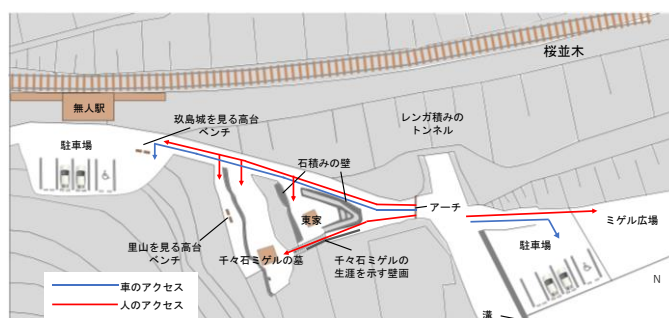


図 18 人と車のアクセス案



図 19 ミゲルの生涯を表す壁画

3.5 地域に広げた計画案：まち歩き「さるく」

「さるく」とは、ぶらぶら歩く「まち歩き」の長崎の方言である。長崎では観光地が数多くあり、「さるく」としてガイドやまち歩き団体が実施するツアーを紹介している。しかし現在まで、里山には設定がない。墓地周辺は、明治時代につくられたレンガ造トンネルや美しい石造トンネル、近隣の伊木力ダムとダム建設の際に住民の要望で植えられた桜並木など多く魅力的な場所である。本研究での調査、分析から、公園計画単独から周辺エリアとその風景、地域産業まで広がる「地域に還元できるさるくを」をコンセプトとして導き出し、提案した。

学生と共に調査を進めるなかで、周辺の山里がとても素晴らしく、四季によって変化する里山の風景大切にしたいということと、この風景をより多くの人々に知ってもらいたいことから「里山さるく」を考案した。墓所周辺をぶらぶら歩く「まちあるき」をすることで環境全体の素晴らしさを多くの人々に体感してもらい、未知の部分も多いミゲルの生涯について考える場とした。また、地域の高齢者や子どもたちが集うことのできる防災上も安全な場も念頭に検討した。

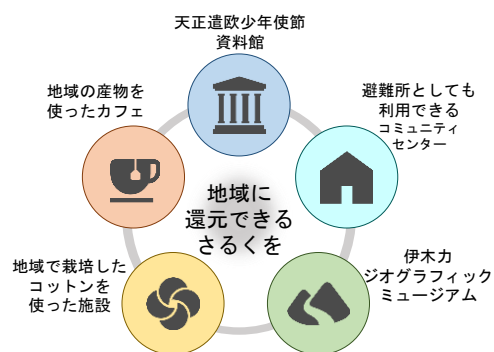


図 20 「さるく」コンセプト

①千々石ミゲル墓所



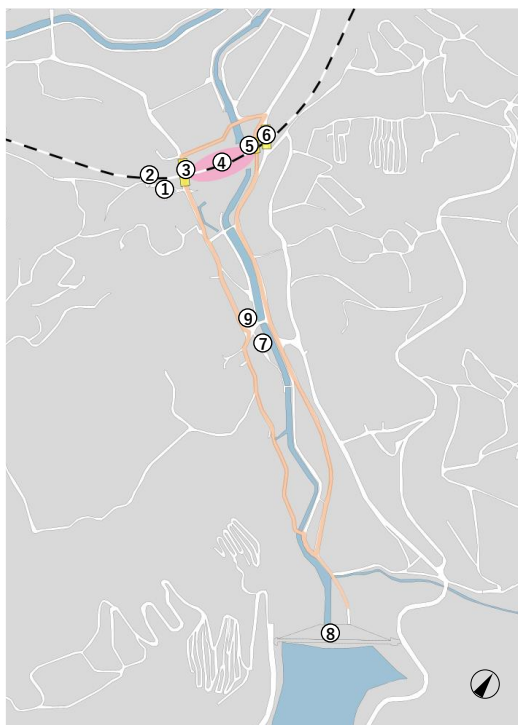
②玖島城を望む高台



③レンガ造りのトンネル



④桜並木



⑤トンネル



⑥石造りのトンネル



⑦鳥居



⑧伊木カダム

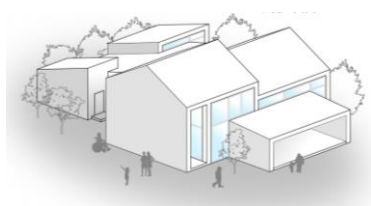


⑨コミュニティーセンター



図 21 「さるく」範囲

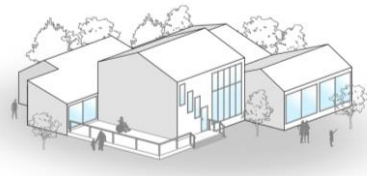
Aコミュニティセンター



B千々石ミゲル資料館



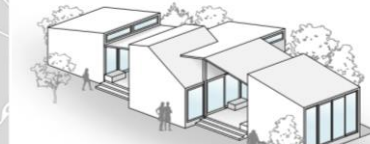
Cジオグラフィックミュージアム



Dカフェ



Eコットン施設



F無人駅

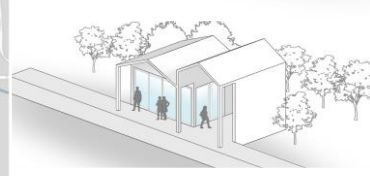


図 22 「さるく」あったらいいと思う施設提案

諫早市には優れた産物があるが、あまり知られていないものもある。これらの認知を広める広報的な役割も期待して計画に組み込んだ。多々良町は古くから「伊木力みかん」として名高い場所であり、最近では「国産アボカド」の産地としても有名である。地元の主婦たちが「オーガニックコットン」畑を運営し作家と連携してハンカチやストールを作成している。長崎街道シュガーロード」の構成文化財として日本遺産に認定されている「諫早おこし」、眼鏡橋やオランダ坂

の敷石など長崎の街並みの石畳にも使われている硬質な砂岩「諫早石」、優れた縫製技術の「ベビー肌着」などである。ヒアリング調査やワークショップでの分析から提案した6施設の内、2施設について以下に簡単に説明をする。

図23はコミュニティセンター平面図である。小規模であるが、防災拠点としての活用もできるように小規模多機能なRC造で、コミュニティーカフェ・学童・ディサービス、精神障害者の見守り・就労支援などの機能もあり、地域の人々が気楽に立ち寄れる施設として多様な利用ができる。イタリアのトリエステにある多機能な地域支援施設マイクロエリアを参考にした。



図23 コミュニティセンター平面図



図24 イタリアトリエステの地域支援施設マイクロエリア

地域ではオーガニックコットンを栽培する活動をしており、学生とともに参加した。畑での軽作業は地域のコミュニティ形成に貢献し、高齢者の健康維持にも役にたっていた。コットンの栽培ができる場・コットンの体験コーナー・作業場を設け、畑で採れたコットンを使った雑貨などを販売する。図25はコットン施設の平面図である。トイレは公共のトイレとしても使える動線にし、防犯面から足元と1.4mの高さにすりガラスを設け、中は見えないが室内の存在は感じられるようにしている。

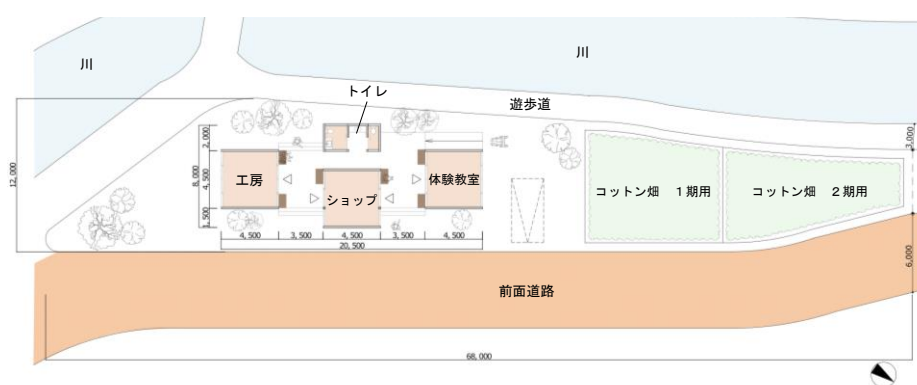


図25 コットン施設平面図



3.6 千々和ミゲルの生涯示す陶板

前述のようにミゲルの生涯を示す絵画を示す壁（図19）を提案した際、住民から長崎県の特産でもある波佐見焼で作成する提案があった。絵は地元の「子供たちに読み聞かせの会」が作成した紙芝居の内、長崎港からヨーロッパに出港する場面の絵（山口美保氏作）と文章（和文：山口

直子氏作)を使わせていただけることになり、橋本彼路子が文章の英訳を含め全体のデザインを行った。波佐見町で月1回行われる朝飯会に参加し、多良見住民が千々石ミゲルの絵を陶板にしたいという思いを相談した。多くの業者の中、伝統ある高山陶器会社が安価でサンプルを作ってくれることとなった。また、陶器が完成するまでの制作過程を見学することもできた。陶板は60cm角のものである。2023年12月14日の供養祭で地域住民にお披露目をした。千々和ミゲルの命日に行われる慰霊祭は仏教の僧侶が唱える読経の中、キリスト教の牧師(プロテスタント)、神父(カトリック)を含むあらゆる宗教の人々が集って参加する長崎らしい平和なイベントである。



図 23 天正遣欧少年使節団の陶板



図 20 慰霊祭で陶板のお披露目場面

3.7 まとめ

地域住民が長い間、墓所を守ってきたことを重視し、現存しているものをなるべく残し、人々が憩える公園にすること、天正遣欧少年使節や千々和ミゲルについてより多くの人々に認知をしてもらい考える場となることを念頭に計画を進めた。公園単体の計画から、周辺地域を取り込み自分たちのまちの魅力の気づきと記憶の継承を意識した広報的啓蒙的な視点を検討した。図面や模型等の可視化による「たたき台」となる提案をして今後の計画に役に立つような成果を残すことができた。

4. 今後の課題

(注) 必要なページ数をご使用ください。

4名の天正遣欧少年使節団の一人、原マルチノは波佐見町(長崎県)の出生地でもある。伝統ある高山陶器会社が陶板サンプルを作ってくれたのもこうした背景があった。従来の公園計画では、行政が住民意見を取り入れる試みをしてきたが、利用者としての参加は限定的であったといえる。本研究では、地域の人々からの要請で行う研究や実践であったので、住民から協力を得やすいという利点があった。この特徴を生かし、天正遣欧少年使節団という謎の多い歴史を背景にしながら、地域の交流による活動を続けていきたい。多良見の住民との協働だけでなく、波佐見町との交流がさらに深まるような活動につなげられないか、もしくは、天正遣欧少年使節の他の2名、伊東マンショ(宮崎県西都市)、中浦ジュリアン(長崎県西海市)についても地域交流によるまちづくりの広がりの可能性を検討していきたい。